

選ばれた一人

山田 稔



山田 稔

選ばれた一人

河出書房新社



選ばれた一人 ©1972

昭和四十七年十月二十日 初版印刷

昭和四十七年十月二十五日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 山田 稔

装幀者 田中 岑

発行者 中島隆之

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京) 一〇八〇二 TEL 二九二一三七一一

印刷 東京印刷株式会社

製本 中西製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

選ばれた一人

——^{ページ}purge という動詞にはどんな意味がありますか。
辞書をひいてごらん。

——①「清める、清浄する、粛清する。」②「(政治上などの責任で)公職から追放する、ページする。」

——どの意味でしょう。

——わかりません。

——すこし考えてみたら。

——三番目の意味がありますが、これとちがいますか。

——三番目の意味？ 何て書いてある。

——③「下剤をかける。」

——それは関係ないでしょう。

と彼は言った。

序 章

その日のひるまえ、授業が再開されて間もない大学へ出かけた逸見仁介^{へんみ じんすけ}が研究室へ行こうと薄暗い廊下をわたって階段の方へむかう途中、彼はたまたますれちがった同僚の一人から奇妙な言葉をかけられた。

「身体みのぐあいが悪いそうですね。どこが悪いんです。お大事に。」

逸見はいったい何のことやらわからず、あるいは人違いかもしれないと怪しみながら階段をのぼって行った。ところがしばらくしてまた他の同僚からほぼ同じような言葉をかけられたのである。

「どうしてでしょうね、ぼくはどこも悪くはないはずだが……」

すると相手はかるい驚きをしめして逸見の顔を見返し、さらに不可解な文句を口にしたのだ。

「どこも悪くないって？ でも健康上けんこうじょうの理由で当分休講って揭示が出来ますよ。」

逸見は「えっ」と小さく叫んで笑い出してしまった。あきらかに何かの間違いだ。すぐ訂正しておかねばならない。だがすでにその掲示を見た学生がいるのではないか。

逸見はその同僚と別れるとほら、この通り元氣一ぱいですよと言わんばかりに小走りに階段を三階までかけ上り、研究室へ入ると早速電話のダイヤルをまわして教務係を呼び出した。「もしもし、英文の逸見ですが、わたしが健康上の理由で当分休講だという掲示が出てるそうですが本当ですか、だれかの間違いでしょう。」

彼は相手の狼狽と恐縮ぶりを予想しながら笑いを含んだかい声で言った。ところが返って来た声は意外にも冷静で確信のこもったものだったのである。

「いえ、間違いではありません。」

「なんですって！」

逸見は思わずさけび、しばらく絶句した。

「間違いいではないって、本人が間違いだと言ってるのですよ。わたしはどこも悪いところはないし、この通りびんびんしていますから……。いったい、その休講の届はだれが出したんです。」

「さあ……逸見先生が出されたのじゃないんですか。……おかしいな。とにかく一度教務までお出で下さいませんか。」

「ええ、すぐ行きます。」

電話を切るとすぐ彼は部屋を出て階下に急いだ。教務係の部屋のドアを勢よく開け、なかを見まわしていると、さきほど電話で応答した係の者らしい若い男が彼の姿をみとめて立ち上り、正面デスクの係長のそばへ行き何事か耳打ちするのが見えた。

頭の白くなった瘦せた係長が逸見にかかるく会釈し、席を立ててすぐそばの簡素な応接セツトの方へ彼を招いた。

「ごぞんじなかつたのですか。へえ……」

これは意外といった風に手を首筋にあてながらソファに腰をおろし、逸見の方は見ないで彼はつづけた。

「連絡は行っているものと思つてましたのに。だれに連絡をたのんだのやつたかいな。」

係長はしばらく考えこむふりをしてから身を寄せ、あたりをはばかりるように声をひそめた。「じつはですな、先生。この件は事務長の方から指示がありましたもんで……。わたしらにも詳しい事情がわかりませんのですわ。事務長さんならごぞんじだと思いますけど。——おい、いま事務長は部屋におられるかちょっと電話入れてみてくれんか。」

彼は若い係員に命じた。

事務長は在室だという返事がすぐもどつてきた。

「それじゃ、先生、ご面倒でしょうが詳しい事情はひとつ事務長の方からうかがつていただけませんか。」

「はい、わかりました。でもわたしが事情を納得するまでは休講の掲示をひっこめてほしいのですが。」

「いや、それは……。とにかく事務長にうかがってから。どうも最近はややこしいことが多いくて、わたしらの一存では何ひとつできませんので。」

最初の狐につままれたような気持からさめるにつれ、逸見の胸のうちに憤りがこみあげてきた。いかに理事会とふかいつながりのある事務長とはいえ、本人に一言の相談もなく休講の掲示を出すなんて越権もはなはだしい。こんな話はかつて聞いたことがなかった。言語道断だ。

教務係とおなじならびに学部長室に接して位置する事務長室のドアをノックすると、若い女性が顔をのぞかせてなかに招き入れた。

事務長は中央の大きなテーブルにむかって昼食をとっている最中だった。逸見の姿を見ると、プラスチック製の出前の弁当の蓋をあわててしめ、茶を口にふくんで二、三度音を立てうがいをしてのみこんだ。

「いやあ、どうも。今日はひるから会議がありますので、まだひるにならないさきからこうして弁当を食べておりますので……。それにわたしらは朝が早いもんでね。」

彼は近郊の小都市から自分の車で通勤していた。薄くなつた髪をきれいにオールバックにし、太い縁のめがねをかけており、話の最中に何度もそれはずしたり掛けたりする癖があ

った。でっぶり太っていたが、巨軀に似合わず声はか細く、ほとんどやさしいくらいだった。「さっそくですが、わたしの休講の件ですね、あれはいいたい何事なんです。」

つい抗議の口調になった。

「あ、あれね。部長先生から聞かれませんでしたか。そうですか。わたしも詳しい事情はぞんじませんのですが、部長先生からそのように手続きするよう命ぜられましてね。」

「堀之内先生から……。理事会の決定でもあったのですか。」

「いや、別にその種のものはございませんが……」

事務長は眼鏡をはずして脹れぼったい眼を窓の方へそらした。部長からの指示があったと聞いて逸見はいささか気がひるみ、興奮をしずめようとつとめながら慎重な口調でたずねた。

「健康上の理由って何ですか。わたしはどこも悪くない。」

「まあ、そうおっしゃらずに。失礼ですが先生はたしか痔がお悪いと聞いておりましたが。」

「それは以前のことですよ。」

「あ、そうでしたか。いや、いつか健康診断のカルテの持病の欄にたしかそのように記されてあったのをいまふと思い出したもんですから。」

事務長ははさまった食物のかすを除こうと歯をシーシーいわせた。

「今日は堀之内先生は？」

「部長先生はこのところずっとお忙しくて。」

「今日のご予定は？」

「いや、それがねえ。かたく口止めされておりましてね。……大学には今日は来られません。」

「でも、わたしは休講うんぬんについては堀之内先生から一言も聞いていないんですよ。ひどいじゃないですか。わたしだけは先生の居所を知る権利がありますよ。これは緊急の場合ですから。」

「うーむ、弱ったな。」

事務長は太い腕を組み、しばらく考え込んだ。

「そうですか。部長先生から何も聞いておられない。そいつは具合わるいな。……それではこの場合は特別に今日の先生のご予定をお知らせしましょう。ここだけの話ですよ。だれにも言わないで下さいよ。万一のことが生じたらわたしの首がとびますからね。」

こうして逸見仁介はその日の午後の堀之内文学部長の居所を知ることができたのだった。そしてついでに、故内野茂人の慰霊祭が一週間繰上げられて、その日の午後彼の墓のある南山霊園でおこなわれることを初めて知ったのである。そのことは公示されず学内で知っている者はほとんどいないはずだった。

南山霊園への道順を事務長におしえられた後、逸見は休講の揭示のことを気にしながらも、

とりあえずいったん自分の研究室へもどることにした。研究室といっても名ばかりで、紛争中の荒廃のあとがまだなまなましく残っていた。壁の落書は消されていたが塗りがえはまだおこなわれていず、片隅にひとつ立っている書架の棚には二、三冊のテキスト類が無造作に立てかけられてあるばかりだ。あとは小さなデスクと椅子が一脚、それですべてだった。

出かけるにはすこし早いので彼は窓ぎわに寄せてあるデスクの前にすわり、窓ごしに外を見おろしながら時間をつぶした。向いの建物のうえにみごとに晴れた秋空がのぞいていた。しかし窓の下のアスファルトの広い通路は建物の谷間になって、まだ日が高いのにそこだけは影につつまれ、すでに日暮れの近さを思わせるあわい灰色のもやがひろがりかけているような印象をうけた。一瞬、時間の感覚が狂った。遅刻しては大変だ。

椅子から立ち上り窓ぎわを離れようとしたときだった。ふと視野の片隅を白いものが横切った。猫だ、と気づいたとき、すでにそれはアスファルトの空間をななめに、背をしなやかに屈伸させながら地上すれすれに飛ぶように一直線に駆けて行きつつあった。

そのとき右手から一台の黒い車があらわれた。

猫と車のたがいに無関係な二つの動きが、ある瞬間、関連をもちはじめたような奇妙な感覚が逸見仁介を襲った。その二つは目に見えぬ一点めざして競い合っているかのようだ。彼は小さなものの動作のうちに機械の正確さを、車の進行のうちに生きものの執拗な意志をみとめてかるい目まいをおぼえた。

音もなく走りつづける車の黒く光る車体にむかって、白い猫は強力な磁気に引きつけられるように確実に接近して行った。

二つの動き、二つの線はみるみるうちに距離をせばめた。

小さな白いかたまりは車体の下に吸いこまれた。

車は何事にも気づかぬ風にそのままのスピードで走りつづけ、やがて建物のかげにかくれた。

彼は反射的に目をとじ顔をそむけた。

アスファルトの表面におしつぶされ、飛び散ったはらわた。濡れたぼろぎれのように地面に張りついた扁平なかたまり。……

だがおそるおそる目を開けて見ると、走りすぎた車の下からまるで奇術のように、潰されもせず血にまみれてもいない元のままの姿の白猫が毬のようにおどりと出たのである。それはバネ仕掛けのように地面から二、三メートルも跳び上るかに見えた。空中でたくみに身をよじり、身軽に地面に降りてまたはね上るそのリズムカルな跳躍の仕方は、トランポリンでのジャンプを連想させた。それはまた陽気な猫踊りのようでもあった。

猫は疲れを知らずその不思議なジャンプを三度、四度とくりかえした。体内のある器官が衝撃をうけて変調をきたし、おのれの意志とは無関係に永遠にその単調な跳躍をくりかえすことを強いられてもしたように。

逸見仁介は、魔法の毬のようにはずみつづける白いかたまりの神秘な力によって縛られたように身じろぎもせず、しばらく窓辺にたたずみその光景をながめていた。

第一章

一

誰かがやって来る。——そのことに逸見はおぼろげに気づいていたが、ふりむいて確かめる気はしなかった。さきほど背後で聞えたように思ったかすかな足音はもう止んでいた。その男は途中で立ち止まってこちらの様子をじっとうかがっているのかもしれない。だがいまはそのことは考えず、ただこのけだるい痺れたような感覚のなかにじっと浸っていたかった。そこは墓地在り尽くしてゆるやかな傾斜をなして崖になだれ落ちる手前の、枯草にかこまれた小さな空地だった。そこからは丘の中腹を覆う黒ずんだ松の緑をこえて明るい眺望がひらけ、その眺望に面して置かれた一脚のベンチが墓参人のための恰好の自然の休憩所を形づくっていた。

逸見はベンチの背に片腕をなげかけて腰をおろし、堀之内教授を待ちながら眼下にひろが